

上総における初唱の檀越墨田氏とその性格

佐 久 間 珖 甫

上総において日蓮聖人直檀に墨田氏がある。墨田氏は高橋氏とも称した、上総の豪族である。従来直檀に就いての研究はいろいろされているが、この墨田に就いて研究されたものを見ない。それは墨田氏に就いての資料が乏しく、また聖人よりの御遺文が一紙も残されていない、そういう関係からであろうと思われるのである。しかしこの墨田氏と聖人との関係は相当深いものがあつたと想像される。伝えるところによると、清澄寺擯出後の聖人は建長五年五月八日墨田氏の崇敬していた上総立森寺に参籠され、そこにおいて墨田五郎時光が聖人の教化に浴したという、そしてこの時光を以って開宗早々初檀の人と伝えていたのである。その後一門の多くが日蓮宗に帰依し、丹波公日秀、またその俗弟と伝える身延三世日進等の直門が輩出している。ま

た縁籍とも伝える、隣郷藻原領主斉藤兼綱も墨田氏のかたらいによって入信帰依し、共に聖人の外護者として、やがて六老日向師の布教を援けるなど、上総における初期教団の形成発展に大いなる推進力となったことが窺えるのである。そこで私は墨田氏とはいかなる出自なるか、また、日蓮聖人との関係に就いて、僅かな資料ながらも、それを考察してみたいと思う。

一、墨田氏の出自

墨田氏は角田、隅田・須田に作り、桓武平氏である。立家の祖を常清と称した、千葉氏系図によると、その祖良文以来上総介として、世々その勢力を房総に伸張していた上総氏の一門である。

墨田氏の祖である常清は上総権介として板東に勢人として知られた上総広常の直弟である。常清は治承四年九月、源頼朝の挙兵に参加し、兄広常と共にその一族を率いて鎌倉幕府の創業に尽し、その功勞によって処々に新領を得た、武藏国の隅田川周辺の地と、駿河国富士郡に新恩による領地を得たもののやうである。墨田の称号は恐らく、武藏隅田の地名を冒称したものである。これに就いて新曾妙顯寺縁起は

隅田氏雖不詳先祖当国新倉、豊島、足立、葛飾、互於四郡内三百五十貫文之地給、代々新倉云云

とあって、墨田氏の所領が隅田川周辺にあったことがわかる。それ故墨田氏はその始めは武藏のみで称し、上総にては多く高橋氏を称していたが、墨田殿といわれ、やがてその居館地を墨田村と称するに至ったものと考えられる。

上総氏の一族が何故に高橋氏を称したか、またそれを称するやうになったのは、いつ頃であつたらうか、それらの事情を説明すべき資料は見当らない。高橋氏は上総国を本拠とした古代的名族である。それは延暦八年同氏が上申し

たという『高橋氏文』に

長世乃膳職乃長^止毛 上総国乃長^止毛 淡国乃長^止毛 定

天

とあることによつて、それを知ることが出来る。『高橋氏文』によると高橋氏はその祖、磐鹿六雁命が景行天皇の御代に御膳の事に奉仕して以来の伝統を以て事に与つていた名門である。しかも祖先以来の膳職の長即ち内膳司の長官として、その職掌から自然、諸国に同族が分布し、また多くの莊園を保有していたものと考えられる。しかし平安末より鎌倉初期の莊園の末期的歴史的展開は、これらの古代的地主名族にも斜陽的な凋落をみるに至つてきた。その頃この上総において在庁官人として、その支配力を拡大していった、武士団上総氏は盛に開拓を進めて、古代地主に接近し、その一族中にはこれらの古代的豪族の莊園の荘司となり、主従関係を結び、或は同盟、婚姻等の融合が行われたのである。上総氏の一族が高橋氏を襲称したのも恐らくかゝる事情によつたものと考えられるのである。この例は敢えて上総氏のみではない、即ち古代氏族の健田氏を襲称

した清和源氏の武田氏、また藤原秀郷流を冒称した、源姓足利氏などがそれである。この高橋氏が吾妻鏡の上に見られるのは、建久元年十一月七日の条である。即ち頼朝は幕府創業一段落後、始めての入洛である、このときの行列は精兵をすぐった随兵三百十三人勇壯を極めた前代未聞のものであったといわれる。この随兵中に、高橋太郎、須田小太夫が見えている。これは恐らく上総氏系の高橋氏であって、上総広常の歿後七年目にあたっている、その年代から推考すると常清の嫡子位かと考えられる、上総氏が高橋氏を襲称したのは或はこの年代頃ではなかったかと推考するのである。

ついで墨田氏の上総における社会的位置を考えてみる、『千葉大系図』によると

常清 相馬九郎、角田祖、領上総郡郷、尽忠於頼朝郷、

広常誅死而後無罪安堵本領

とある。上総氏の惣領広常は寿永二年十二月頼朝の疑をうけ、鎌倉の柳営に於いて梶原景時の誘殺によって滅亡したのである。その後の上総氏一族は一時暗い時日を過さなく

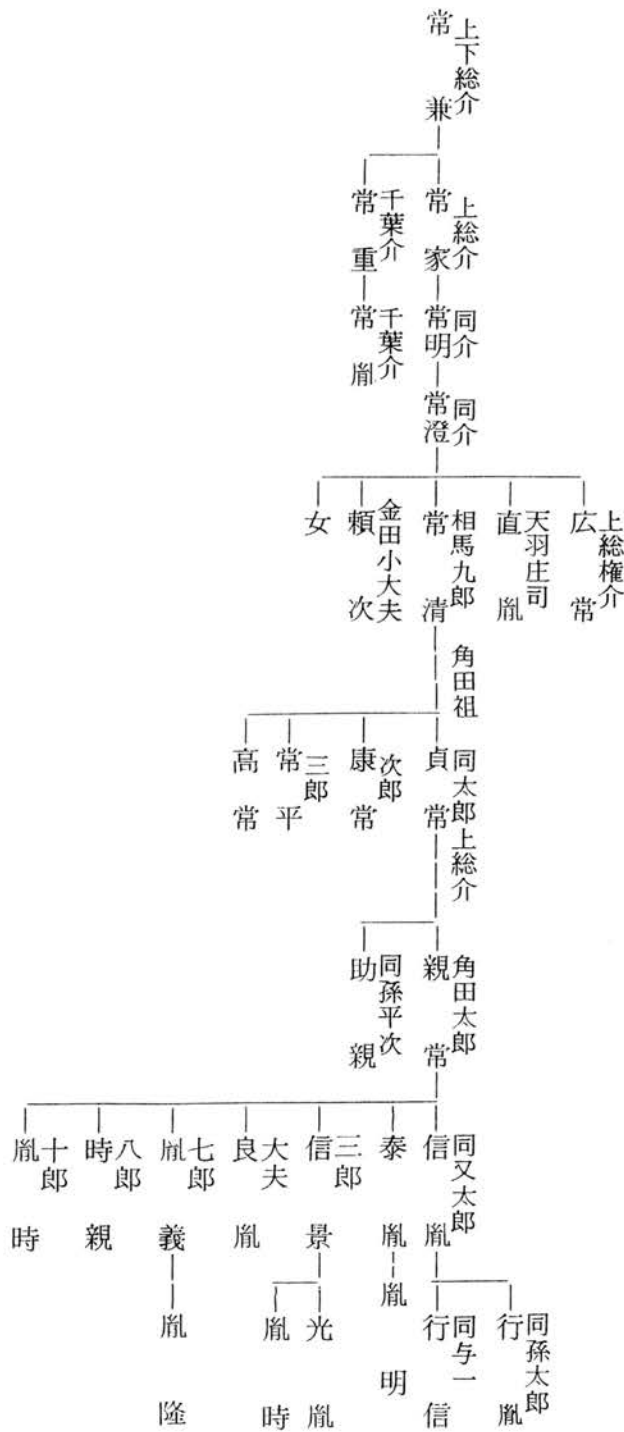
てはならなかった。しかるにやがて広常の無罪が判明し、墨田氏も他の一族と共に旧領に安堵されるに至った。しかし惣領広常の歿後の上総氏の族長的支配形態は広常の直系であった、常清によって継承されたものと思われる。千葉系図によると常清の子貞常、角田太郎、上総介と見える。また千葉氏の氏寺金剛授寺（千葉妙見別当、今はない）の古記録といわれる『千学集』に上総介家系を載せ

一、常清胤親上総国角田と号す御子十人

とあり、上総の各地に分布し繁栄したものと考えられる。（千葉大系図は胤親は貞常の子としている）

常清の子貞常が上総介となつたとすると、それはいつ頃であったか、上総権介広常の滅亡後の上総介の職は頼朝によって、足利義兼が任ぜられたのであるが、いかなる事情であったか、文治五年十二月義兼は上総介を辞退した。その結果朝廷は建久元年正月、平親長を上総国司に任じた。系図に見る墨田氏の上総介就任は恐らくこの親長のもとにあったと推測される。これらの事情からも当時の墨田氏の社会的位置は略想像出来る。しかしその後における墨田氏

墨田（角田）氏の家系（千葉大系図、神代本系図による）



の勢力の推移は史上に見られない。多少の盛衰はあったにせよ、鎌倉幕府創業以来の御家人とし、また上総国の伝統ある名門として、当時における社会的、また経済的な面に於いて額る恵まれた武門であったことは想像にあまりあるのである。

二、日蓮聖人の笠森寺参籠

開宗を宣して清澄寺を擯出された、日蓮聖人は一時華房の蓮華寺におちつかれたものいよいよ鎌倉伝道を開始、鋭意布教展開を決意された、その目的とするところは、世界の妙法化である、それには先ず最高支配者たる北条執権

を教化し、それによって世界に及ぼすことであつた。それにはまず、その推進力となるべき有力階層に教線を向け、それをルートとし、またその外護によるものが最も有利であり、布教の常道として極めて当然のことである。開宗後白羽の矢を上総墨田氏にあてたと推考されることは、前述の如く上総の豪族であり、鎌倉幕府内に重きをなす御家人として、また祖先以来の権勢に、多くの階層にその血縁を有し、外護者として最も充分な資格を備えていた。即ち建長五年五月八日聖人は遠路はるばる笠森寺に参籠されたとする伝説はそれらの事情を物語っているものと思考されるのである。

聖人の笠森寺参籠に就いての文献としては―元龜二年辛未春三月 笠森寺阿闍利坊 権大都 行讀一の奥書を有する『日蓮上人笠森寺参籠由来』一卷が最も古いようである。この由来書中に『当寺古説に曰く』とあり、この書以前に既に伝え来た説であることがわかる。次にその一部を引用してみよう。

(中略) 抑も当山は往昔伝教大師の開基し給ひ人皇六十

八代後一条天皇の御建立、関東随一の霊場、天台止観の宝房にして、帝の勅願寺也。上人思し召けるやうは、妙法の題目を唱え始め初檀外護を得べき事容易にあらず、此霊場に過る所あるべからずとなん。建長五年四月八日(行学朝師の「元祖化導記」に「御弘通発心事」「生年三十二建長五年^癸三月二十八日」とある)当山に詣で給ひ、仰ぎ願はくば、心願成就なさしめ給へと、深く観世音に祈誓し奉り、苦を抜て樂をあたふるゆうたすぎ、かけてぞたのめあのみよ、このよを念じ給ひ伝教大師の啓を求めて、撃鳴し、三七法華経を誦誦し籠らせ給ひけるに、その丹誠を受納しおはしけるにや、満んする夜、宮殿のうちに物音して観世音おごそかなる微妙の御声にて、汝一乗妙法を弘めんと欲す、志いと殊勝也。近きほとりに、墨田五郎といえる、もののふあり来て汝と心を合すべしとなん。上人うち驚き、夢幻の心地して感応肝に銘じ、難有なさに、惣身頻に汗ながる、歡喜礼拝し、踊躍し止ざりき。漸く暁の空いとあかるなりて、鳥の鳴き渡らんと思ふ頃、墨田五郎参詣し、観音を拝み奉り、

やをら上人に見へ給ひ参候某過し夜、不思議の靈夢を蒙り奉り、かく値ひがたき上人に結縁し奉る事、すぐ世の因縁深からめ、誠に大悲の御力こそ有がたけれとて、隨喜の泪を催しけれ、ほのぼのと旭の輝きあがらせ給へば、幸ぞと五郎に向ひ妙法の題目をさずけ、法華の要文杯とき聞せ給ひける。是妙法の題目をとなへ始め、法華を説記法しそめける権輿は当山にして、一宗の初檀は墨田五郎なりき。五郎まめやかに悦び入道して日徳といえるが、其後墨田の郷に妙源寺を建立す、しかのみならず漢原遠江守へかくとかたらひければ信心浅からず、法花堂を建立し、知る所ただちに五里ほどの民家みな此の題目を尊み待る（下略）

とあるこの書は多くの縁起書に見られる夢告靈感説をとつて、修飾されている。そのペールの影に何らかの信憑性が考察される。

この笠森寺は清澄寺と同じく慈覚流の山門派に属し、既に開かれていたと思われる板東三十三観音の靈場として第三十一番の札所に指定されていた。この観音靈場は鎌倉時

代の中期頃、西国三十三番観音札所を東国に模設したものであって、その創設には各々その地方の、守護、地頭の如き権勢者の支持、推挙によつたものといわれている。この笠森寺もその例にもれず、当時鎌倉幕府内にも重きをなしていた、墨田一門の信仰を集めていた名刹であつて、恐らく墨田氏の推挙によつて札所に指定されたものと思考するのである。また笠森寺はその位置が東上総より鎌倉への街道筋にあつたので、聖人もかつて鎌倉遊学の折など屢々立寄られたところであろう。また想像を逞しくするならば、清澄寺と同宗の關係にある笠森寺の住僧は、聖人と旧知であつたかも知れない。笠森寺の住僧の墨田氏への連絡によつて、時光が笠森寺に登り、聖人に会われたとする方が自然であると推考するのである。その時の詠として

憂きに降る 泪の雨にぬれじとて

今日笠森を 身に着つるかな

が笠森寺に伝えられている。この詠はいろいろと解釈されているようである。しかし私は聖人の開教第一日よりその危機の上に立つた聖人の胸中感慨を卒直に詠じられている

ものと思われるのである。この時、時光は聖人を自らの須田館に招じ、その一門が帰依したが、墨田氏のかたらいに依って隣郷、藻原領主齊藤兼綱も藻原の松原の館に聖人を招じた、これは五月十一日のこととしてゐる。聖人はこれより一度、安房小湊に帰られ、いよいよ鎌倉伝道展開の途につき、嶺岡山を越えて、南無谷より船によって鎌倉に向われたものと思われるのである。この笠森伝説に就いて従来の日蓮伝記の多くが文永四年のこととしてゐる。しかし

『高祖年譜攷異』は文永四年説をとりながら『藻原記 係之建長五年』と藻原旧記を註している。文永元年久し振りに鎌倉より郷里安房に帰省された聖人は、文永四年に至る間屢々房総地方の遊化をこゝろみられている。その間上総路の道すがら、この笠森寺や墨田高橋氏また藻原齊藤氏等の檀越訪問は当然であつたであらう。文永元年小松原法難後も、これらの上総の檀越等は聖人を途中まで迎えたといふ伝説が残されている。その折、藻原において民部日向師が聖門に入ったと伝えているのである。私は文永四年の笠森寺參籠説は勿論否定すべきでない、しかし聖人の笠森寺

參籠の始めは、建長五年のこととする説はいろいろの点から、恐らく事実であつたものと推考するのである。

三、墨田五郎時光

上総における最初の直檀と伝える墨田五郎時光に就いて、従来その詳伝を見ない。六牙日潮撰の『本化別頭仏祖統紀』に「武州新曾妙顯寺第二代日徳上人伝」を次の如く載せてゐる。

諱、日徳、俗姓、者、墨田氏、俗名五郎時光、総之上州、墨田次郎時忠嫡孫、中老秀上俗姪也、入高祖室晚年出家とある。また、建立、玄得の『高祖年譜攷異』は統記のこれをとりながら「高橋時光称、五郎、総州墨田村人、又為墨田氏事跡未詳」としている。統紀の墨田次郎時忠の嫡孫、日秀の俗姪は何れの出典によられたか不明であるが、これは明かに誤謬であらう。また、玉沢日通は『祖書証義論』に「日徳沙弥、須田五郎時光入道也。上総武蔵両所也。新曾新倉領主」とし、墨田次郎時忠に就いては「上総墨田、武蔵須田五郎ト一家也」と考証している。

しかしこの時光を千葉氏関係諸系図の上に求めても検証出来ないのであるが、永仁三年以来、応仁に至る間、上は上皇、公郷より、將軍武士、僧侶の歿年を記した『常樂記』に

嘉曆三年戊辰

三月二十一日 高橋五郎時光他界

と見えている。これによって、時光が普通尋常の武士でなかつたことが推知出来る。

開宗早々日蓮聖人の笠森寺參籠に際し、墨田一門中特に五郎時光が逸早く聖人の教化に帰依したと云う、この伝説が事実とすれば、聖人と時光との間に何等か特別の關係が思考されるのである。これに就いて直接これを説明すべき資料はない。しかしその傍証として私は、葉室中納言定嗣の日記である『葉黃記』の記述を採り上げて、聖人と時光の關係を推測してみたい。この「葉黃記」は「葉禪記」ともい、寛元四年（一二四六）より宝治二年（一二四八）記述されている。宝治元年五月九日の条に、京都東山、新日吉社の小五月会のことを載せている。この新日吉社は後

白河法皇が叡山東坂本の日吉大社を京都東山の地に勧請し、新日吉社と称し、朝廷の大切な行事である、小五月会をこの社前において行われた。この祭には上は上皇、法皇も臨幸し、多くの殿上人も奉仕し、極めて盛大な行事であった。この通例諸行事中に東国武士による流鎬馬の行事が六波羅探題、北条重時のもとに行われたことがわかる。次にその一部を引用してみよう。

九日辛酉 今日新日吉社小五月会也。上皇可有臨幸。

此社後白河院御建立、此神事毎年御願也。承久三年以後天福後堀河院有臨幸、其後、又絶了雖無御幸如形行之然而不及流鎬馬也。

（中略）

相模守重時朝臣於棧敷見物（下略）

御神事 社家沙汰

神輿 御幔

祝師 八女

師子 道張

神宝 田樂二座 本装束 社家沙汰（下略）

沖馬 唐鞍 在社家(下略)

一、流鏑

一番 相模守 重時朝臣

射手 一字欠 逸見四郎源義利

的立 桜井左衛門尉滋野宗平

二番 小笠原太郎入道長経

射手 回余一太郎源清経

的立 土持左衛門太郎田部秀綱

三番

射手 千次郎左衛門尉藤宗盛忠

的立 波多野藤左衛門尉藤原広範

四番 佐々木隠岐次郎左衛門尉泰清

射手 子息新左衛門尉源義重

的立 桶口左衛門尉 藤原忠継

五番 太田二郎左衛門尉政正

射手 子息太郎太江政綱

的立 得田左衛門尉藤原盛助

六番

射手 子息四郎平政景

的立 高橋新左衛門尉大宅時光

七番 長井左衛門太夫泰重

射手 菅生左衛門次郎小野高泰

的立 新河右衛門尉藤原高重

この交名中に、高橋新左衛門尉大宅時光が見えている。こゝでも時光は高橋を称している。新左衛門尉とあるが、時光は元服後間もない若年であったと考えられるので、京都大番役出仕の前後に於いて、任ぜられたものであろう。

宝治元年といえ、日蓮聖人もこの頃叡山に遊学中であった。上総の豪族高橋氏の曹子たる時光の在京はいつか知られたであろう。房総の出身である、互に遠く異郷にあってはなつかしいものである。しかし、この小五月会に時光の若武者振りを聖人は見物されたかどうかは推知の限りでない。小五月会のあった翌月、即ち六月七日には鎌倉に宝治合戦が起き、時光の郷里、上総一宮では評定衆の上総権介秀胤が、三浦泰村に党していた為、幕府軍に攻められ、一宮大柳館に於いて、その一族と共に自害滅亡した。吾妻

鏡によると十四日そのことは京都に報じられたという。叡山遊学中の聖人もそれを聞かれては、清澄時代旧知の近郷武士がこれに参加していることを想像され、また時光はその一門一族がこの合戦に従っていることに、窃かに心労を碎いたものであろう。もしこの頃聖人と時光との間に親交があったとすれば、当然この事が話題となったに違いない。聖人も『宝治合戦すでに二十六年』(佐渡御書)と、後年宝治合戦を述懐されているのである。

私は推考を重ねながら、日蓮聖人と時光の関係を想像して見たのである。若しこの想像が許されるとするならば、叡山遊学中の聖人と時光の大番役出仕中の親交が、やがて開宗間もない聖人の上総訪問となり、こゝに時光の当初直檀の意義も自ら成立する。そしてこのことは上総における初期日蓮衆形成の歴史の上からも重要な意味をもつものと考えられるのである。

四、時光の信仰と晩年

時光の法華信仰に就いては、その資料を欠き明かにし得

ない。ことにどうしたことか、時光に対しての御遺文が一紙も残されていないのである。しかし所伝の如く上総における日蓮衆はこの時光の初唱によって始まり、墨田一族とその血縁と云われる藻原斎藤氏等を中核として展開したものである。然るに聖人の鎌倉での折伏行進が猛烈を極め、幕府内にも屢々問題が起伏するに及び、时光は自ら幕府内に於ける地位の関係から、幕府方面に対し遠慮する向きもあつたと思われる。これはその一門であつた駿河の高橋六郎兵衛も同じであつたと思考されるのである。その点は法華信仰の上から強信者であつた、富木、四条氏等とは同じに考えられない。しかし时光の信仰は表面的なものではなかつたとしても、決して退転するところなく、内面的にこれを支持し、寧ろその理解を幕府内に注入した一人であつたことは事実として考えてよいと思う。

文永八年九月に発した竜口法難はまた日蓮衆に対して相當きびしい弾圧が与えられた。これに依つて弟子、信者の離散がはげしく、「千ガ九百九十九人ハ墮チテ候」(新尼御前御返事)と述懐された程で、殆んど日蓮衆は懐滅に瀕

する状態となった。勿論この間に於いて信者の所領没収等も処々に行われたものであろう。

この間にあつて時光に対しては、幕府内におけるその地位から、幕府方も如何ともなし難かつたものであろう。時光の信仰は何等緩むところはなかつた。それを傍証する伝説が残されている。

文永八年十年十日、日蓮聖人は佐渡流配のため、警護の武士を交えた一行は、相模国の依智を發つた。その日は武蔵国の久米川の宿に一泊、翌十一日、越後路を少し迂回して、いささか遠廻りとなる、武蔵新倉の時光の下屋敷に立寄られたという。その理由は時光の妻室の安産祈禱のためであつた、警護つきの流配者の一行が、途を逆手に、安産祈禱とは何事か一介の武士にして到底出来よう筈のないことであろう。この伝説は恐らく事実であろう、このこと出来た時光の幕府内の地位も自らわかり、時光の信仰がそれを物語っているのである。この祈禱によって出生した男子は、徳磨と称し、やがて九才となつた、弘安二年十月、時光はその御礼を兼ねて、徳丸を伴ひ身延に登つたという。

その時聖人は時光に対し、本尊を認められて直授された。今、新曾妙顯寺に格護されている、子安本尊と称されるものがそれである。即ち

弘安二年^{太才}己卯十月 日 沙弥日徳授与之

と添書があつて、時光に授けられた真跡として現存する唯一のものである。時光が日徳と号したのも恐らくこの頃かと思われる。時光の子徳磨はやがて日向師の門に入って日堅と称した。時光の晩年に就いては何等拠るところなく不明である。時光の晩年頃の社会状況は、鎌倉幕府も衰運に傾き、末路的兆候があらわれてきた、时光は武蔵の所領を子息、徳磨に譲り、自ら入道して、京都に隠栖したものかもしれない。

最も関係深い、新曾妙顯寺過去張も「正中二年^{乙丑}十二月十二日年不明」とし、上総須田妙源寺に至つては「歿年不明」としている。また前記の常樂記は嘉暦三年三月二十一日他界としていて、各々その歿年が一定しておらず、何が正なるか、にわかになめ難い、恐らく時光の晩年は京都に隠栖してそこに歿したものである。